

いつもとは違う、記者時代にやり残したことを思い出したような感覚が一瞬、深雪の脳裏を通り過ぎたのは、検察事務官をやっている夫の達也を起こす時間を気にしながら、八月二十日の朝刊社会面下段にあった十行ほどの記事に目が行った時だった。

〈十九日夕方四時頃、札幌市北区にある集合住宅の一室で、二十代の男性が意識不明の状態で見えられ、間もなく死亡が確認された。男性はこの部屋に住む佐藤真さん（二十五歳）とみられ、現在、北警察署は自殺したものとみて調査を進めている〉

いつもは目に止まらないような小さな記事なのだが、佐藤真という名前の活字は勝手に深雪の眼に飛び込んだのだった。あの佐藤真（まこと）だろうか、もう出所していたのだろうか、でもまさか自殺なんて。しかし、自殺したのが本当にあの佐藤真であつたならば、それはあまりにも哀しい。そんな思いの中に、「奴は寂しかったのかもしれないあ」、そう言う中さんの声が聞こえたような気がして、深雪は久しぶりに中さんに電話してみようと考えていた。

「もしもし、中さん？」

スマホの連絡先に、〈ちゅんさん〉のナンバーを探し出した。

「お、ミーじゃないか。久しぶりだな。あ、もう藤枝深雪じゃなくて、東城事務官の奥さんだったかあ。気軽にミーなんて呼べないか、え？」

あの頃に戻ってみたい。少し照れたような中さんの声は懐かしかった。

「中さん、昨日の朝刊に佐藤真が自殺したという記事があつたのですが、中さん、その記事読みましたか？」

「ああ、読んだよ」

すぐに、それが何だよ。そんな感じの声が返ってきた。

「あれって、あの佐藤真でしょうか？」

「・・・ああ、そうだ」

だから何だよ。そんな感じの間があつた。中さんのこの返事の様子から想像できることは、中さんもまた、佐藤真のことを多少なりとも気にしていたのではないかということだ。

「佐藤真はもう出所していたのですか？ それに、本当に自殺だったのでしょうか？ 自殺だとすれば、どうしてなのでしょう。おかしいと思いませんか？」

そこまで言ったときに、中さんの声が挟まってきた。

「おいおい、俺は、奴が今年の初めに出所して、そして、この度自殺したということしか知らんよ。自殺したというのは事実らしいが、自殺の理由なんて知っているわけがないだろ。大体だな、お前さんが佐藤真のことが気になるというのは分からんでもないが、もう、ミーには関係ないことだろ」

「でも、中さんだって、佐藤真が出所していたことを知っていたなんて、彼のが気になつていたこととでしょ。あの時、傷害致死の判決の時に、中さん、どうして正当防衛という判決にならなかったのかと悔しがっていませんでしたか」

「そうだったか？ まあな、心残りがあったのは確かだがな」

あの時、中さんは「これじゃあ、〈有罪率九十九・九%〉の記事が書けない」と悔しがっていたが、本当は、佐藤真に同情の気持ちがあったのだらうと私は思っている。

「心残り、私です。私は、佐藤真が意図的に被害者に近づいた可能性も否定できないと感じていましたから。単純に傷害致死の判決というのも、どうなのかなと」

「ああ、覚えているよ。お前さんは、検察の主張の通り、殺人の線も完全には捨てきれないって言っていたよな」

「ええ、まあ、あの事件発生の経緯については、納得できない点もありましたから」

佐藤真に殺人の確定的な故意があったと断言できるような証拠はなかった。しかし、未必の故意、争いの中で相手が死んでしまうかもしれないという意識は無かったのだろうか。

「まあ、確かに、佐藤は傷害致死の判決に対して控訴しなかったんだから、ミーの言う通りだったのかもな」

そう、もしかしたら、佐藤真にとっては覚悟していたよりも軽い判決だったのかもしれない。

「だからですよ、中さん。佐藤真は、折角、判決の通り刑に服して出所したのに、出所して間もなく自殺してしまうなんて、腑に落ちないんですよ」

「あのなあ、もう、そんなことはどうでもいいだろ。どうせ、一事不再理なんだからさ。それともなにか、自殺じゃないって言いたいのか？」

中さんの呆れたような声が耳に届いた。確かにそうなのだが……。刑事事件の裁判で判決が出て、控訴期間の十四日が過ぎると判決が確定し、再度の審理を行うことはない。それに何よりも、佐藤真の場合、刑期も終えているのだ。

「いえ、そういうわけじゃなくて……。なんとなく気になるものですから」

「首を括ったらしいぞ。覚悟の自殺だよ。ところで、そんな話をしたくて電話してきたのか？　少しは気の利いた話でもないのかよ」

「で、遺書は無かったのでしょうか？」

「全くな、お前さんらしいよ。遺書のことは知らんが、餅は餅屋だろ。そんなに気になるのであれば、ちよつと亭主にサービスしてみたらいいじゃないか。彼はあの時の担当検事の事務官だったんだからさ」

記者だった頃の昔の雰囲気を楽しい。それから、話の内容は、退職してからが忙しいという中さんの強がりになっていった。

「じゃあな。何か分かったら連絡して来いよ。昔みたいに話を聞いてやるからさ。亭主には、あまりごちやごちやした話はできないだろう。下手をすると、検察の捜査が間違いだつたってということにもなるからさ」

電話を終える時の中さんの言葉で、あの傷害致死事件のことが鮮明に脳裏に蘇ってきた。事件が起きたのは、深雪が日読新聞の東京本社から北海道支社に転勤になって二年と少しが過ぎた頃、令和二年の六月、大雨の降った日曜日のことだった。